

『舞台は夢』（作：コルネイユ）

行方不明の息子の消息をつかむため父親プリダマンは友人ドラントとともに洞窟に棲む魔術師アルカンドルのもとを訪ねる。すると魔術師は息子の幻影を浮かびあがらせ、父親は次々と息子の身に起こる奇想天外な出来事を目撃する！思いもよらないクライマックス、果たして息子の人生の結末やいかに！？真実と虚構、喜劇と悲劇が入り乱れ、劇中劇など、舞台ならではの工夫と仕掛けがちりばめられたフランス古典劇の巨匠コルネイユの傑作。演出は2010年にSPACで『令嬢ジュリー』を上演したフレデリック・フィスバック。2004年に母国フランスで本作を手がけており、当時は上演数140回を超えるロングラン・ヒットを記録、大きな話題となった。日本ではSPACのほか結城座、青年団など数多くの国際共同製作作品を手掛けるフィスバックが、自身の代表作をSPACの俳優らとスリリングに描き出す、演劇の魅力が溢れる舞台。

『王国、空を飛ぶ！～アリストパネスの「鳥」～』

戦乱の世に嫌気がさしたアテナイ市民、エウエルピデスとピステタイロスは、鳥の王者テーレウスのもとを訪れ、鳥の王国の建設を提案する。ふたりの計略に驚嘆したテーレウスは、ただちに空中を城壁で囲み、鳥たちが集う王国を作り上げる。天の神々と地の人々との間に挟まり、人々から神々への捧げ物も、神々から人々への接触も、すべて自分たちの許可なしにはなされないという特権を築いた鳥の王国は、神々にも人々にも分け前を要求し、理想郷として繁栄する。これに驚いた地上からは、王国の栄華にあやかろうと人々が到来し、これに慌てた天上からは、王国を籠絡してしまおうと神々が到来する。かくして神と人との挟み撃ちにあう鳥の王国を守るべく、エウエルピデスとピステタイロスは、神をも人をも手玉に取って奮戦するが――。SPAC所属の演出家として、静岡県内はもちろん岡山・鳥取・大分・山口・東京など、日本中を飛び回って活躍する大岡淳が、古代ギリシアの傑作を脚色。経済格差が拡大し戦争の危機にさらされる現代社会を揶揄し風刺し挑発して、21世紀の希望を描く音楽喜劇！

『薔薇の花束の秘密』（作：プイグ）

現代ラテンアメリカ文学を代表するアルゼンチン作家マヌエル・プイグによる二人芝居。登場人物は精神を病み入院している老婦人とその付添婦。徐々に心の距離を縮めていく二人だが、実は付添婦はある嘘を隠していた。嘘が発覚した時、二人の間にあった愛情は憎しみへと変わっていく。「蜘蛛女のキス」などで知られるプイグが日本での上演を熱望したと言われる『薔薇の花束の秘密』。たった二人の登場人物が、劇中何役もの人物を演じ、会話劇のだいご味をたっぷりと味わうことができる舞台。2014年の読売演劇大賞で大賞・最優秀演出家賞をダブル受賞し、いま最も注目を集める演出家・森新

太郎による SPAC 初演出作品。

『黒蜥蜴』(作：三島由紀夫)

秘宝“エジプトの星”を狙う美貌の女盗賊・黒蜥蜴と名探偵・明智小五郎の対決。江戸川乱歩原作によるアクロバティックな冒険譚を、三島由紀夫が独自の美学と手法によって戯曲化。戦後の日本文学界を代表する作家のひとりであり、『鹿鳴館』『近代能楽集』『サド侯爵夫人』など数々の戯曲も残した三島由紀夫の退廃的耽美世界。静岡芸術劇場の舞台を縦横無尽にかけまわりながら、変幻自在に姿を変えては人々を翻弄していく女盗賊・黒蜥蜴の内面を魅力的に描いていく。SPAC-静岡県舞台芸術センター芸術総監督宮城聰の待望の最新演出作。

『ロミオとジュリエット』(作：シェイクスピア)

舞台は14世紀のイタリアのヴェローナ。モンタギュー家とキャピレット家は昔から血で血を洗う抗争を繰り返していた。モンタギュー家の息子ロミオは、ある日友人らと宿敵・キャピレット家のパーティに忍び込む。そこでキャピレット家の一人娘ジュリエットに出会い、二人はたちまち恋に落ちる。二人は密かに結婚するが、その直後、ロミオはキャピレット家のティボルトを殺してしまう。ジュリエットは修道士ロレンスに助けを求め、仮死の毒を使った計略を立てる。しかしこの計画がうまくロミオには伝わらず、ジュリエットが死んだと思い込んだロミオは彼女の傍らで死に、仮死状態から目覚めたジュリエットはロミオの死を嘆き、自らもその後を追う。西洋と東洋の美が融合した舞台上、様式美に彩られたジュリエットの死はかつてないほどの劇的な結末を迎える。スイスを拠点に活躍する演出家オマール・ポラスが SPAC の俳優と共に創り上げ、3ヶ月間に渡るヨーロッパ・ツアーも果たした舞台の待望の再演。